



この本は、帰宅恐怖症の男性の行動を次のように描写する。常に妻の顔色をうかがい、妻とのやりとりに疲れ、帰宅が億劫

になり、仕事が終わっても会社に残り、まっすぐ家に帰らず、わが家を目の前

にしても近くの公園のブランコ

で家の灯りが消えるのを待つ。

氏は次のタイプを指摘する。

「帰宅恐怖症になりやすい」夫

気弱で優しい型

我慢型、争いごと苦手型、外面

人間型、面倒く

さがりや型、お子ちゃま型、父親が気が利かない型、母親がヒステリー型、母親が過干渉型、

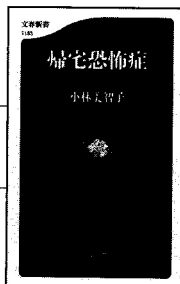
女性慣れしていない型。「夫を帰宅恐怖症させやすい」妻

「夫を怖がらせた良い妻型、白黒はっきりした良い妻型、束縛型、

マイルールいっぱい型、ボス型、ヒステリー型、母親が感情的で

ヒステリー型、父親大好き型、

帰宅恐怖症



小林美智子 著

842円 文春新書
03-3265-1211

男性慣れしていない型。また、「帰宅恐怖症になるメカニズム」としては、想像力から「妄想力」へと発展してしまう妻、「闘うか、逃げるか」と考えてしまう夫などの話が続く。ありそうな話である。

小林氏は、最後に「夫婦関係は育て続けるもの」と助言する。その通りなのだが、評者は、その前に大きな障害があると感じる。夫婦間のコミュニケーションについて、ある女子学生が「なぜ女のほうから努力しなければならぬのか」と私に言った。形の上では平等であつても、

「自分のほうからどうするか考える」という平等の前提そのものが男女ともに崩れているのではない。教育の世界では、キャリアにおけるコミュニケーション力の育成ばかりに目が向いているようだが、個人の充実と社会の存続のためには、「夫婦関係力」の育成にも目を配る必要があるだろう。

(聖徳大学教授・西村美東士)